

# Roman de la Rose

## に見らるる「l'amour」について

若 杉 泰 子

「Roman de la Roseの成功は直接的でかつ大きく、16世紀の後半まで続いた。」

と Roman de la Rose についての比類なき権威者 Langlois はのべている。この物語の後世に与えた影響についてはいずれの日にかその影響を受けた作家たちを一人一人挙げて詳述する時もあるうと思われるので、最も顕著な例のみを挙げるにとどめれば、F. Villon に影響を与え、Rabelais の特に宗教的哲学的問題解決、カトリック教会に対する態度と間接的なつながりを持ち、Pléiade の詩人たち特に Du Bellay から「読まれるに価するフランスの作家たちは僅かに Guillaume de Lorris と Jean de Meun」と評価され、Ronsard 若き日の livre de chevet であり、「恋人にあらまはしき美について」の Ode で女性必読の書としてすゝめてゐる、ことを挙げるにとどめよう。

ではこの Roman de la Rose とはどんな物語であるのか。手短かに云えば、Rose で象徴される美しく乙女に恋した詩人が彼女

の心を獲得する迄の心理的な曲折の二つ二つを人格化した物語である。例えば恋につきものの中傷は Male-Bouche という名の登場人物となり、乙女が示す好意は Bel-Accueil、その優しい眼差しは Doux Regard、羞恥心は Honte といった工合である。この物語は Guillaume de Lorris と Jean de Meun の二人の作家の手になつて居り、通常 Guillaume の書いた四千行ほどを第一部、Jean de Meun の書いた約二万七千行を第二部と云う。

さて二人の作者になるこの第一部と第二部は制作年代でも大きくみて六十五年、小さく見ても三十年のひらきがある。量的な差は一見して明らかであるが、内容に見られる差はさらに大きく Roman de la Rose という同じ名で呼ばれてはいるがまったく正反対の性格を持つ二つの物語と思へる程である。第一部は小じんまりとした典型的な宮廷向物語で、物語の筋に乱れがなく、登場人物に与えられている image も整っているに反し、第二部はいわば教訓文学とも云うべきものであり、第一部で完結寸前であつた物語の筋は遅々

として進まず、全然関係のないあるいは無理矢理引っぱって来られた登場人物が出てきたりして尨大かつ混沌たる様相を呈している。

而して第一部と同名異人の感のある登場人物たちの語ることは、あるいは13世紀というスコラ哲学最盛期のパリ大学神学部の講義内容であつたり、当時の人心を騒がせた論争であつたり、ホメロスを始めとするギリシア・ラテンの作家たちの解説であつたりして、きわめて複雑多岐、第二部が百科全書といわれる所以である。このような次第であるから第一部と第二部に見られる思想内容の相違を個々の主題について検討することは意味の無いことではないと思われ。私は第一部と第二部に見られるかかる相違の最も具体的かつ典型的な例として Amous の問題を取り上げて見た。私の意図する所を端的に述べれば、第一部は amous courtois の文学でありこれは即ち *culte de la femme* の文学である。これに反し Jean de Meun の手になる第二部は *contre amour courtois* の文学であり女性嫌悪の文学であると思われているが、実はその女性嫌悪を通して人間の平等、女性解放が謳われていると見たいのである。先ず最初に出てくる *amour* についての *Raison* の説教は一見中世の人間像の完成をなした、聖トマスの教説と合致するもの如く見えながらむしろ異教的なものを加味したレアリスムを示していること、次に男性のために *amour* を説く Ami の自称 *parfait amant* の愚弄である。私見によれば Jean de Meun において女性嫌悪といわれるものはむしろ *Trombadours* の伝統的 *amour courtois* を成文化した *André le Orapelain* の *De Amore* のほうに強く見られると思われる。即ち Ami によつて女性の為に *amour* を語る *Vieille Gardie* の *me* の云々といふは Ami の説にもまして女性をこそおろし女性の

軽薄さを非難しその不誠実さを糾弾させる材料を供しているのであるが、それが現実を曝露する徹底したレアリスム文学となることにより、逆転して女性の当時おかれていた社会的状況への批判となり、さらに女性のうちにとらえられた人間性への理解と同情ともなつてくるのである。即ち精神的なものはすべて男性の徳に数えられ、女性とは直ちに肉体であり情欲と物欲の対象としてしか評価されていないように見えるが、実はそれが空虚な観念性に対する内容豊かな現実性、人間性を女性に与えることになつて居り、これは遠く *Renaissance* に到つて、同じく女性嫌悪者と見られている *Esisme* の痴愚神札譚が男性の観念化された抽象的精神性に対する諷刺の書であり、女性の名を以つて人間性の再興を歌つたのと同じ意義を有するもののように思われる。かく見れば Jean de Meun は決して *misogyne* ではなくるのであり彼のレアリスムによる *amour* 観は、Guillaume de Lorris の *amour* が空虚で抽象的な *Culte de la femme* しかなし得なかつたのと異なり、女性のあり方の現実直視から来る具体的現実的な内容を有つた人間性探求の意義を持つものとなつてくるのである。この事は彼が Ami の口を通じて両性間の平等という注目すべき思想をのべていることによつても明らかであると思われる。

Guillaume de Lorris は *Roman de la Rose* を愛の命令によつて、愛する女性のために書いた。先ずこの動機そのものが宮廷的である。彼の夢物語の始る季節は恋の季節春である。又、この物語の展開される場所が高い壁にかこまれた果樹園であり、そこで春を楽しむので輪舞を踊る人物たちが、無為、悦楽、美、富、

「雅び」青春等である<sup>⑧</sup>ことはこの物語の読者層として上流社会が想定されていたことを意味する。私は Roman de la Rose 第一部の宮廷的性格はこのことだけでも立証できると思うのである。何となれば、Anglade の Les Troubadours にみられる宮廷的恋愛の理論の中に今挙げた諸特徴の一つ一つが含まれているからである。<sup>⑨</sup>愛する女性を悦ばせるため、という点に見られる女性尊重。Jean de Meun に見られる物質によって女性の欲心を得ようとする態度より遙かに精神的である。<sup>⑩</sup>春という季節の描写から始ること。<sup>⑪</sup>高い壁をめぐらした果樹園で象徴される吟遊詩人の生活していた社会の閉鎖の上流社会。<sup>⑫</sup>第一部全般に流れている paganisme。<sup>⑬</sup>かく考えてみると Guillaume de Lorris は吟遊詩人たちの立派な末裔であると云えよう。では南仏の吟遊詩人たちが歌った amour courtois とは何か。

先ず愛する女性に献げられる愛とは culte に近く、宗教性が濃厚であった。そして parfait amant たる為には守るべき規則と掟があったのである。愛する女性に対してはその些細な気紛れに対しても、騎士の領主に対する如き服従を要求された。恋は誓いであつた。amant には noblese が求められた。

Amant となるために四つの段階があつた。一、sompriant。二、suppliant。三、amoureux。四、amant。女性が詩人を amant と認めることは通常接吻で表わされた。Amant の守るべき義務は三つあつた。一、慎しみ。愛する女性の名を詩に表わすことすら慎まねばならぬ。彼女は通常、Belle-Vue、Plus-que-Reine、Mieux-que-rien 等と呼ばれた。次に来る義務は限度なき忍耐。忍耐した期間の長さは愛の証でもあり、又この試練なくして、愛する女性の

心を獲得したよこびは味わえないとされた。三、女性に求めるものはつまじきものであること。

愛する女性に要求されるものは肉体の美しくさと賢さ。詩人は自らの愛人にふさわしくなるために完全であらねばならず、その完全さの中心は節度であつた<sup>⑭</sup>、さらにギリシア、ラテンの文学も南仏を通して諸国に伝播され、キリスト教も又同じ経路を辿つたのであるから興味深いことであるが、吟遊詩人たちの宮廷的恋愛詩が頽廢期のラテン文学を祖とした故か正しい意味でのキリスト教的性格を欠いている。このことは Roman de la Rose 全般にわたつてキリスト教的性格を持つ登場人物が登場しないことにその影響をうかがうことが出来る。もともと、第一部で Guillaume de Lorris の語る愛は、女性に対する、殆んど宗教的な尊敬の念に根ざした、諸徳を修得しながら行なわれる自己昂揚であつたけれども。

さて Jean de Meun が書いた第二部で愛はどのように扱われているか。

Guillaume de Lorris は Bel-Accueil、つまり乙女の詩人に對する好意を塔に幽閉し、堅固な城を建てて詩人を閉め出してしまつた。その城の防備の堅固なことに来たら、垣をめぐらし、茨を植え、深き堀を穿ち、東方の門を Danger が南門を Honte が、北門には Peur が、そして西門を Male-Bouche がそれぞれの軍隊を率いて護衛しているのである。もとより詩人は悲しい。すっかり絶望してかなわぬ恋を長々と歌うが、この独白の途中で Guillaume は筆を擱いている。多分死んでしまつたのだろう。そして独りぼっちで愁いに沈んでいる詩人を慰さめに Raison が再び塔より降りてく

るまでに、序に述べた如く、かなりな年月が流れる。ともあれ *Raison* は塔より降りて来た。その語るところを要約すると次の如くなる。

先ず恋する者の魂の混乱状態を描写した後 *André le Chapelain* の「恋愛論」を借用して詩人のとりつかれてゐる *amour* を定義する。*amour* とは世の中の人ごとごとくが權る狂氣 (*maladie de pensée*) である。それによつて男女は節度を失つた眼差で見つめ合ひ、抱擁し合ひ、接吻し合ひ、*et Jour charnellement l'un de l'autre*。世の恋人たちはこのことばかりを考へてゐる。恋愛そのものは悪ではない、然し身も心も獻げるなどこ約束して *parfait amant* のふりをしながら、信じやすい女性を軽蔑し、快樂を護るまでは嘘をならべてゐる人もいる。まあそれもまだマシなほうだ。というのは欺されるよりは欺す方が得策であるから。然し眞の恋と言ふものは *Raison* の言うところによれば、「自由な人たち」の間、つまり、結婚の絆に縛られていない人たちの間でしか成立しない。そういう自由な人たちの恋の眞の目的は種の保存、つまり子孫を残すこととだけばならない。何故ならそれが地球上のすべての種の保存を司る *Nature* の意向であるから。 *Plaisir charnel* は人類が種の保存を忘れぬようにするため恋に付加されたものに過ぎない。だから恋の眞の目的を忘れて快樂にばかり走る恋は罪悪である。ここで *Raison* は先に述べた眞の恋を今少し補う。愛される女性は品行正しくあらねばならない。男から金銭や品物を巻きあげてそれと交換して体売するような女を愛してしまつたら、恥をかかされるだけである。快樂にとらわれず、友情の印のついたささやかな贈り物を交換し合うような、つつましい恋人たちが結ばれることが望ましい。恋

は心より生ずるものである。⑧

詩人よ、と *Raison* は続ける。汝の心を占めてゐる恋は *Plaisir charnel* を対象としてゐる。だからバラを得たいと望むのだ。愛の神に従つたのは誤まりであつた。かかる恋を捨てよう勧めめる。かかる恋は汝の青春を荒廃させ、やがては空費した時を哀惜することにならう。⑨

「然しあなたの教えを実行を移すことは、*Amour* がこれを妨げます。もしも人を愛してはいけないなら、私は終生を憎悪のうちに送ることになりますし、かくして私は大罪人になります。もつと他の愛はないのでしょうか。⑩

*Raison* は詩人のこの問に答へて *Amitié* を説く。眞の友情は友人相互間にかくし事なく、*Fortune* に動かされなから、順境にあつても逆境にあつても變ることなく求められずして助け合うものであつて、*on aime les gens pour eux*。この友情は徳ある友情である。⑪ さて次に利害で結ばれた愛がある。これには注意せねばならぬ。これは *Fortune* に左右される愛であり、他人の富をアテにしてゐる。だから不安定で友人が貧困に陥つたり汚名を蒙ることがあるとそういう愛で結ばれた友人たちはさつきと居なくなつてしまふのだ。富者やけん坊の取りまかれてゐる愛はかかる愛であり、彼らは決して眞に愛されることなく、又富を掠められまいと氣にするから彼等は決して愛することもない。⑫

次に特定の人に向けられる愛でなく人類全部に向けられる愛がある。それは福音書の説く隣人愛である。この愛は諸徳の中で最高の徳であり正義にまさるものだ。というのはこの愛が広く人々の間に行き渡つていればこの世に罪はなく、世は平和であり人々は皆徳を

有し、裁判所や法官は無用となる。◎

又、本能的な愛というものもある。これは動物にも人間にも見られる愛で子孫を産み育てる自然的な傾向である。この愛は必要なのであって自由でなく、賞讃にも、非難にも値しない。つまりスコラの人々が *appetitus naturalis* と呼ぶところのものである。

然し今迄 *Raison* の説いたような愛はすべて詩人の心を動かさない。そこで *Raison* はこの長い説教を切りあげて彼女自身の愛、つまり学芸への愛を詩人に提供しようとする。人間は愛なしに生きられぬから。 *Raison* の愛は詩人をして想像し得る限りの最高の高貴な状態におくであらう。 *Raison* は神の愛娘であり神の聖顔を映しているのだから、かくして詩人は諸王侯にまさる偉大な者となるであらう。他の愛は規制されなければ放任におち入るが、 *Raison* を愛することに限度はない。学芸への愛は神の望みでもあり、神御自身が詩人を指導し給う。そして詩人は運命の気紛れにとらわれぬ世界最大の賢人ソクラテスの如き者となるであらう。

*Raison* の述べる愛についての説教は作者 *Jean de Meun* の *amour* 観を理論的に述べたものであると考えてよいであらう。さて以上の敘述を分析すれば、 *Jean de Meun* の愛が六種類に分類されるのが判る。一、 *amour charnel*。これは唯情欲の満足のみを目的とする愛である。したがってこの愛には嘘と欺瞞がつきまとうのは当然であらう。 *Jean de Meun* は動物にもある本能的愛を最後に述べているが、理性的動物である人間においてこれがそのままの形で行なわれるならば、即ち *amour charnel* となるのであるから、この本能的愛に別に一項目を与える必要はなく *amour charnel* の下に一括して分類することが許されるであらう。二、自由人の

愛。この愛は種の保存を目的とし快樂は追加物、即ちあらずがなものと考えられる。然しこの愛は結婚を束縛と見ている。自由人とは結婚しない男女のことである。 *Jean de Meun* は一子を儲けながら結婚しなかったアベラールとエロイーズとの恋を感激した調子で語っているが、かかる愛が彼の理想とする自由人の愛であったのである。ところでこの愛が種の保存を自然の命令として愛の目的としながら、結婚を束縛と見、自由恋愛を理想としているのは、聖トマスに代表される正統的神学思想の説く理性的結婚観と背反するものとして、注目に値することと思われる。三、 *Jean de Meun* は友情をその持続性を基準として二種に頒つ。運命に左右されぬ眞の友情を *Amitié* と呼べば、運命に左右されるそれを、聖トマスの用語にしたがえば、これを *amour de conuoitise* (利益のための愛) として区別することが出来るであらう。五、人類愛。特定の個人に向けられたこの愛はキリスト教的隣人愛に他ならない。六、 *Raison* の愛、学問への愛に他ならないこの愛は、神の愛娘である理性に導かれるとは云え、その理想像がソクラテスと云うギリシア古代の哲人をもつてきているところから見て純粹なキリスト教的学問的愛とは異質のものと考えられる。 *Raison* は神の愛娘というよりはむしろ獄中にあるポエティウスを慰さめた、かの「哲学」の女神であるのではなからうか。

以上我々は *Raison* の説教そのものの分析によつて愛を六種類に分類したのであるが、 *Roman de laRose* の権威者 *Paré* 師はそこに唯四種類しか見てゐない。即ち一、 *amour charnel* 二、 *amour d'Amitié* 三、 *amour de cupide* 四、 *amour naturel* の四つである。 *Paré* 師によれば *Raison* の説く愛は *Jean de Meun* がそ

の同時代人である聖トマスの愛の理論をそのまゝ引き写したものとらうことであるので、次 Etienne Gilson : Thomisme 第三部第二章 l'amour et les passions より聖トマスの説くところを調べてみよう。聖トマスも愛を四つに分類する。即ち一、l'amour sensitif 二、l'amour intellectuel 三、l'amour d'amitié 四、l'amour de convoitise の四つである。この中で Paré 師の云ふ l'amour charnel (一) と l'amour naturel (四) とは聖トマスの云う l'amour sensitif (一) を二つにわけたものであり、又 Paré 師の云ふ l'amour de cupide (三) は聖トマスの云う l'amour intellectuel (二) であり、又聖トマスの l'amour d'amitié (三) と l'amour de convoitise (四) とを一つにして l'amour d'amitié (二) としたのであるから、Paré 師が云う四種類の愛はたしかに聖トマスの四種類の愛の分類と内容的に一致する。然しそれが果して Jean Meun が「理性」をして語らしめている彼の愛の理論を正確にとらえているかどうかは一応疑問とされうるのではなからうか。

Raison がこれ程までに懇切に忠告してくれるのに、詩人は彼女のお説教を受け入れない。「私の頭はバラのことで一杯です。あなたのお説教は聞きあきました。」そこで Raison は立ち去り詩人は依然として悲しい。そこへ Ami がやって来る。彼は恋のベテランである。そして今までの一切の経過の報告をうけた後で、甚だ実際的な忠告、つまり婦人誘惑術を教へるのである。

先ず今の所は風が過ぎ去るまで低姿勢であらねばならぬ。城に近ずいてはならぬ。Male Branche に対してはソツなく振舞い必要とあらばサーヴィスも厭うな。Jalousie (乙女の両親) には尊敬を

装へ。他の人たち、つまり Honie Pour Danger には種々の贈り物や金で彼らの心を和らげるようにせよ。それだけの財力がなければ約束だけでもよい。恋の苦惱を語り、同情を惹くために手を合わせ騒いで泣け。涙が出なかつたら唾でもつけておくといふ。彼等に近づくことすら不可能なら贈り物を添えて密書を偽名で送れ。何故こらまでしなければならぬかは Honie, Pour, Danger が詩人を拒む乙女の羞恥心や恐怖の人格化であることを考え合せれば自ら理解できよう。

乙女に近づくことが出来たら花の冠や宝石を贈れ。こうして乙女の羞恥心や恐怖を鎮めることが出来よう。彼女の前で歎きかつ泣けばよい。それでも乙女の心が開かぬなら黙つて引きさがれ。誇り高き女の方から詩人の後を追うようになる。およそ恋する男はその相手の女性を所有したがつていてることを感ずかれぬようにせよ。彼の愛の純粹さを信じ込ませる様にせよ。どんなに厳格な女性も無条件で与えられるものには弱い。然し愚図々々して求愛を遅らせていると折角の女性を他人にとられることになりかねない。女性の側からの求愛を待つ男は余程その容貌に自信がある男だ。然し今あげたような手段よりもっと有効な方法がある。それは相手に対して寛大であり、惜しみなく自由を与えてやることだ。でもこの方法は金がかかるし貧しくなれば友人たちからも婦人たちからも顧みてもらえなくなる。

Ami の忠告はここから性格が変わり、詩人個人に対して、ではなくおよそ恋する若者すべてに婦人誘惑術を説き、「一度成功したら、今度ほどのようにしてその婦人を「長く楽しむか」を教えることになつ

てくる。そのためにはある程度の教養も必要だし、自身の容貌を誇  
ってもならない。恋敵の出現を辛抱すべしだし、女性には完全な自  
由を与え、彼女の意志に背いてはならず、叱責するなどはもつての  
他、不当に扱われてもむしろそれを感謝すべしだ。かかる概念は吟  
遊詩人たちの宮廷風恋愛を想起させるが、実際に説かれているのは  
それらのものの偽装である。そもそも女性は生来傲慢で不実、虚栄  
心が強く悪徳をそなえているとされている。

Amiの忠告の底本がオヴィディウスのテキストであり、オヴィデ  
ィウスはその「恋愛術」を頌した風俗下に生活していたローマの  
青年貴族のために書いたことを附言しておく。だから最初から  
Jean de MeunはAmiに男性のための amour chanel 追求術  
を臆面もなく説かせているのであり、たまに amour courtois の理  
論に近いものがあってもそれは外見だけで、女性は依然として快樂  
の道具であり、吟遊詩人たちが女性に賦与していた尊敬、神秘性が  
一片も見られない。

さて、詩人がAmiから甚だ実際の忠告を受けているところへ  
Mari Jalous がとびこんできて、妻にみられる悪一つまりは女性の  
悪を訴え始める。妻は夫を裏切り、夫が不在中にコケツな装いを  
して浮気な若者たちの心を惹きに外出する。ために夫は世間の物笑  
いの種。家庭では夫を冷遇するしだらしない服装をするのに、情  
人には夫に与えない特権を享受させている。要するに彼女はコケッ  
トで、金使いが荒く、浮気で、夫を裏切る。夫たるもの、妻を厳し  
く監視せねばならぬ。

ところでこの Mari Jalous は大愛博字で、Juvénal, Virgile,  
Ovide, Tite-Live, Boèce, Theophraste, Heroïse等賢人の教えを  
引用して結婚生活は女性の諸悪徳故に「悪しき絆、狂気の沙汰」で  
あることを証明するための結婚哲学を展開する。女性の傲慢さと  
愚かさのために家庭には風波が絶えない。貧しい女を娶れば養うに  
金がかかり、富める女には威張られる。美女は他の男達から狙われ  
るし、醜女は皆の気に入られようと媚を売る。女性は皆官能を好み  
不実である。古代にはルクレチアとかペネロペの如き貞女も居た  
が、それは昔のこと。現今貞女なんて白い鴉の如く、まず居ないと  
云ってよい。故に賢人は結婚を忌避した。それに不実、などは最小  
の罪だ。Juvénalによれば女は悪をなすように生れてきている。  
サムソンはデリラに欺かれたではないか。結婚する位なら首を縊つ  
たほうがマシだ。女性の服飾も気に入らない。美しいものの美は美  
くしいもの自体にあるのであり、それを飾る女が美しいのではな  
い。

Mari Jalous はAmiが話し始めた女性の悪徳をさらに強調しに  
来て、女性は生来悪なのだから、という理由で結婚を否定する。先  
に Raison は自由人、つまり結婚の絆に縛られない人たちの間での  
恋愛を讃え、結婚を否定したが、ここでは結婚否定の理由がひたす  
ら女性の責任にされ、男性のみに、快樂を獲るための欺瞞と身勝手  
な自由を認め、女性に人格を認めず、唯快樂の道具としか考えられ  
ていない。Mari Jalous の非難を裏返しにする、つまりその非難を  
通して彼にとっての理想の女性像を推定してみると、唯一人の男  
に忠実で、つつましく装い、宝石などはつけてならず、夫を愛し、

他の男たちを近ずけず、侯爵家で、謙遜でかつ聡明でなければならぬ、ということになる。亭主関白、とは洋の東西、古今を問わずおよそ男性たるものの理想であるらしい。さてかかる理想的女性が居たとしよう。彼女に対して、AmiとMari Jolouxは如何に振舞うのだろうか。たしかに彼女の心を得るまでは、オヴィディウスの教えるまゝに千変万化の手段をつくし、快樂の対象として彼女を大切に、つまり慎重に欺む。さてそれがさらに發展して結婚すると彼女は一つも愚痴をこぼしてはならず、夫が外でかりに他の女性の愛を得ようとして恋文を書こうと、高価な贈り物をしていようと、粗衣粗食に甘んじなければならぬいわば奴隷の境涯におかれるのである。Roman de la Roseの第一部を交えていた宮廷的恋愛にみられる理想の女性像には肉体の美しさと賢さが要求されていた。

Mari Jolouxも女性に聡明さを要求している。然し真に聡明な女性なら、かゝる奴隷的境涯を拒んで修道院にでも入らさう。何しろ、どれ程男性を誠実に愛しても、AmiもMari JolouxもRaisonも、それを一方的に女性にばかり要求し、自分たち男性のためには、不実である自由だけはしっかりと確保しておくのだから。結局女性は欺むかれ、楽しまれた果に容色おとろえると措てられる。動物同様に自由のない夢い玩具なのである。

TalorsieはBel-Accueilを塔におしこめ、老女を一人監視につけておいた。この老女も又Amiと同様恋にかけては経験をつんでいる。彼女がBel-Accueilに説くところは次の如くである。おおよそ賢女といわれるために心得ねばならぬ条々のうち為してはならぬことはといえは唯一人の男に執着し寛大なることだ。賢い婦人は

恥ずることなく慕いよる男たちを剣ぎとりかくして富裕になるべきである。恋は収入源であり、恋を以てて家族、親族、下僕たちを養わねばならぬ。だから恋人の数は多いほど良い。あらゆる誘惑の手段をつくして男たちを誘惑し、その一人々々に誠実を誓え。ゆめゆめ貧者に憫れみをかけてはならぬ。ホメロスやオヴィディウスいへども貧しかったら追放すべきだ。かく貯えこめば婦人は花の盛りを過ぎもて生活に困らない。

男性が不実であることを銘記せよ。だから婦人も不実であつて良い。お互に生来自由であり、自然は我々を同じように創つたのだ。唯だ、例えば結婚が彼女たちをある種の条件にしたがわせているだけだ。であるから結婚及至婚約している女性たちは少くとも精神的には不実である。結婚が制定されたのはおそらく男性間の喧嘩を避け、子女の教育を確保すべく賢人が定めたのであろう。然し結婚によつて拘束された婦人の自由恢復の欲求は他ならぬNatureの抗しがたき掟なのだ。かゝる次第で結合と不可分を要求する結婚の掟は自然に反する。この抗しがたき自然の力に従わぬ婦人は怖れと世間態で抑えられているだけである。

先ず老女は、唯一人のアレゴリーでない実在する登場人物として、女性の愛の報いられぬこと、男性が身勝手な不実であることを認めている。その説くところはAmiの説くところと対をなす男性誘惑術の受身ではあるがかなりの積極性のある実際の教訓であり、Amiがamour charnel追求術を教えたとするなら、彼女はamour de convoisise追求術の教師と言えよう。そして彼女の教訓の内容の露骨さに、当時の男性の横暴さに対する実際的な復讐のような念のようなものがうかがえるように思われるのである。男性が不実なのだ



から、女も不実であつてよいと云うのは、眼には眼を、齒には齒を  
という思想であるように思える。先にもふれたように *Ami* の説く  
ところからは、およそ良心というものを持ち合せていないド・ン  
ファンが浮び出てきた。そして老女の説くところからは、男がド  
ンファンであることを知りつつ欺かれた風を装つてさらに男を刺ぎ  
とる、もう一枚上手の利発で狡い女性像が出てくる。即ちこのよう  
な女性像を描くことで *Jean de Meun* は、結局のところ女性を欺  
いたつもりで実は欺まかれていた自称 *Parfait/ amant* を徹底的に  
愚弄し戯画化したのであつて、通説のように女性嫌悪の一言で以つ  
て、*Jean de Meun* の恋愛観を片付けることは一考を要するよう  
に思つて来るのである。老女をして、*Bel-Accueil* つまりバラと呼  
ばれる乙女の心に、男性の不実さを現実として受け入れさせ、な  
らに欺かれた風をして逆に欺けと純心な乙女には耐へがたいような教  
えを恥ずかし気もなく語らせている事の中に、女性の地位の不安定  
さに対する間接的な同情すら読みとれるように思えるのである。

以上述べてきたことを要約してみよう。*Guillaume de Lorris* の  
手になる第一部において、愛は典型的な宮廷風恋愛であつた。第二  
部で *Jean de Meun* の手にかゝると愛は分析され、理論化され  
る。そして六種類に分類された愛の中で、この物語の筋と密接なか  
わりを持つものが *Raison* の分種したものの中 *Amour charnel*  
と *Amour de convoitise* であり、前者は *Ami* によつて後者は老女  
によつて露骨なまでに具体的に語られてくる。*Mari jaloux* は *Raison*  
のふれた結婚否定説を強調するために挿入されたに過ぎない。そし  
て第二部の登場人物たちを通じて *Jean de Meun* が語るの第一

部では宗教的なまでに美化され観念化された宮廷的恋愛の現実を曝  
露し、やたらと精神的でその実無責任きわまりない恋愛と嘲笑し、  
自称 *Parfait amant* の正体を示し、それを夢見がちな乙女に敢て  
教え、彼女が惨めな境遇におちないようにしたと云えよう。然し遠  
くはオヴィデウスに発し近くに *André le Chapelain* に説かれた  
宮廷的恋愛と、*Jean de Meun* の説いた愛とは果して正反対の性格  
をもつものだろうか。もしそうだとしたら、その差異はどこに見ら  
れるか。

*Amour courtois* の理論の中で、愛される女の資格の一つに肉  
体的な美があつたことを想起して欲しい。宮廷風恋愛がどれ程崇高  
な観念に包まれていたとは言え、この一事からうかがえる如く既に  
女性は快樂の対象として見られていたと思える。*Marcabrun* は恋  
と女性を痛烈に諷刺したが、ここにも既に、真の恋と偽りの恋の混  
同が歎かれていた。彼の詩的活動の終りは大体一一九五年であり、  
*Guillaume de Lorris* が筆をとる三五年前のことである。であるから  
一部の書かれた時代には宮廷的愛の観念と現実との間にくっきりと  
した断層があつたと考へるのはあやまりではなからう。実に *André  
le Chapelain* の恋愛論はこの空虚でその実不道德さわるる観念の  
成文化なのである。

ところで *Jean de Meun* がこのような愛を罪悪とする理由は種  
の保存が忘却されている。ということにあつた。神の代理者なる  
*Nature* の使命は地球上すべての生物の種を保存することである。  
この使命は神から与えられたものでそれに背くことはしたがって罪  
である。故に種の保存を軽視する単なる *amour charnel* は人類が  
自からの種の保存をおろそかにしないために付加されたものであ

り、それのみを求めめるのは本末転倒である。そしてこの点では聖トマストマスの教えと一致しているかに見える。兩者とも種の保存を重視したし種の保存を考慮しない恋は非理性的であると見た。しかし聖トマスにおいては種の保存のためには両親による子女の養育と教育が必要とされ、そのために結婚が要求されたが、Jean de Meunにおいては結婚は愛にとって自由を拘束すべきものではないと考えられている。では種の保存は如何にしてなされるかといえは、Mari Jalouxの言から推すにすべて女性の負担と責任において考られているのである。

しかも女は快樂の対象だったのだから、何時捨てられるかわからず、老女のすゝめを受け入れて、女が不実になったとしても、それは一種の必然であったのだ。故にその無責任々を見ると、Jean de MeunとAndré le Chapelainとの差は種の保存という言葉の有無だけとなり、まず五十歩百歩の差であると言えよう。

次にJean de Meunにとつての理想的恋愛像はアペラールとエロイズに端的に示される自由人の間の恋、結婚に拘束されない恋であったし、結婚の理想としては男女の積極的な平等が謳われた。即ちMari Jalouxの話をきいたAmisは結婚生活において男は女の主人であつてはならず女も又男に対して女主人であつてはならない。自然は吾々を同じく自由に作つたのだから、結婚と愛が両立しがたいのはその平等の均衡がやぶれるところにある、と説くのである。聖トマスによる結婚とはRaisonの言葉を借りれば、Amour d'amitiéとAmour de convoitiseの一致せるものがあり、Jean de Meunとの混同を避けるためには付言すれば、聖トマスの云う後者の意味は男女両性が、精神的にも、物質的にもお互いの不足を

補うということである。これを老女の説くところから比べると自らわかるようにJean de Meunはamour de convoitiseを物質的にのみ解釈したのである。ゆゑにJean de Meunによれば、自然が男女に同様な自由を与えている、ということであるが、これは自由恋愛のすゝめに他ならず、この点でも聖トマスの云うような精神が欠けている。

Jean de MeunはRaisonに自らの考えている愛の総論を語らせ、他の登場人物たちにそれを具体的に示した。それはRaisonの項で言及した如く、Paré師の思われた程には聖トマスと一致していなかった。この不一致はAmis Mari Jaloux、老女と進むにつれてますます大きくなっていったが、約言すれば、聖トマスからキリスト教的な精神性を抹消し、一つのマキアベリの現実主義とおきかえると、Jean de Meunが出来るように思へるのである。

唯注意したいのは聖トマスとJean de Meunの両者の境遇の差である。前者はドミニコ会の修道者であり、貧しくとも学問に専念し、純理の世界に生きることができたし、それ丈彼は司教顧問の職録で生活しなければならなかつたらしいJean de Meunが、見聞せざるを得なかつた現実とは遠かつたと云えよう。もとよりJean de Meunは聖職者だから、神学の領域ではカトリックの立場を明うかにし信仰を擁護するが、彼は理論と現実の割れ目をよく知り、それ故にこそ登場人物たちに粗野に語りさせているのはより広い大衆を対象として考えたからであらう。こゝに教訓文学としてのRoman de la Roseを価値あらしめる一端があるのではなからうか。更に彼は、いくら声を大にして結婚の神聖、男女の平等、つまりは女性の地位向上を説いてみたところで、時代の風潮を一人で動かすことは

不可能である、ということをも、現実的な人間として良く知っていたであろうから、女性嫌悪、女性諷刺を表面に出しその悪徳を話しながら、自然的な平等の主張で女性の不実をます合法化しておいて、結婚や恋愛での実際でのトラブルの根を消した。女性の傲慢とか、虚栄とかに対する非難は根拠薄弱であり、Anniのドンファン性から云えば、求愛を容易に受け入れない女性は傲慢であり虚栄心が強い、ということになりかねないのである。こうなると男性の不実を徹底的に批判し、女性の不実を自然的傾きで合法化したことの意義は大きい。私には彼が自然の名において女性に対する一種の寛容を説いたと思えるのだが、これは思い過しであろうか。さらに彼はAnniに語らせた男性批判の行き過ぎをも同じく自然の名において和らげたのだがこの寛容という点では、Deesse Folieの働きである恋のお恵みのおかげで味わえる結婚や恋愛の幸福を説いたエラスムスの先駆であり又、Jean de Meunの云う自然を積極的に考えて、その男女両性に与える平等を考えると、ルネサンス人の寛容な微笑を遙かにしのぐ革命的な思想であると言うのは余りにも大きな飛躍であろうか。

さらに自然は Dame Nature と呼ばれ神の代理としての高き職分を与えられていることを考えよう。男性の放縦が批判されるのは自然自身が与えた自由を奪ったからであるかもしれない。如何に当時の女性が地位高き人でも不安定な境遇にあったとは云え、聖トマス⑧の如き正統的なキリスト教的感覚と同じ感覚で Jean de Meun が自然を考えていたかどうかは、この Dame と云う呼称が疑わしめる。そしてもし私の考える如く、その自然観が異教的だとしたら、自然は豊饒の女神であり大地であり、したがって女性は豊かきと

自然の恵みの具象であったと思われる。Jean de Meun の自然的平等とは、かく考える時、彼が生きた時代の上流社会の恋愛に対する最大にして最小の抗議であったと思える。かく見れば彼の女性嫌悪をそのまま信じこむ事は皮相な見解なのではないかと思へてくるのである。

- ① Ernest Langlois: Le Roman de la Roëe T.I.P. 32 S.A.T.F. 版
- ② Le Roman de la Rose Version attribuee à Clément Marot. Cisalpino 版 T. I. P. 14
- ③ 同前 P. 24~27
- ④ ≪ P. 28
- ⑤ ≪ P. 28~29
- ⑥ ≪ ≪
- ⑦ Ernest Langlois: Le Roman de la Rose. S. A. T. F. 版 T. II P. 3. V. 35 以下 Roman de la Rose のテキストはすべてこの版による。又テキストはもろろ中世紀仏語なので、詩句に Langlois が付した数字のみをあげて置いた。
- ⑧ V. 40~44
- ⑨ V. 45~52
- ⑩ ホイシンガ「中世の秋」兼岩、里見訳、第八章「愛の様式化」一六〇頁
- ⑪ Anglade: Les Troubadours, chap. iv. La doctrine de l'amour courtois P. 77
- ⑫ 同前 chap. L'art des troubadours, les genres. P. 57
- ⑬ 同前 Chap. II. Conditions des Troubadours P. 43

- ①⑦ 匣 匣 Chap. K. La poésie religieuse P. 196  
 ①⑧ 匣 匣 Chap. W. La doctrine / del'amour courtois P. 74~87  
 ①⑨ 匣 匣 Chap. K. La Poésie religieuse P. 197  
 ①⑩ V. 3833~3894  
 ①⑪ E. Langlois ; Le Roman de la Rose T. I. P. 3  
 ①⑫ V. 4293~4340  
 ①⑬ V. 4378~4386  
 ①⑭ V. 4391~4402  
 ①⑮ V. 4403~4421  
 ①⑯ V. 4557~4597  
 ①⑰ V. 4600~4628  
 ①⑱ V. 4628~4672  
 ①⑲ V. 4680~4768  
 ①⑳ V. 4679~4836  
 ㉑ V. 5434~5534  
 ㉒ V. 5763~5782  
 ㉓ V. 5825~27  
 ㉔ V. 5795~5808  
 ㉕ V. 5847~50  
 ㉖ G. Paré O. P. Les idées et les lettres aux X<sup>e</sup> et XI<sup>e</sup> siècles, Le Roman de la Rose chap. W. Le Discours de la Raison P. 97  
 ㉗ V. 7220~28  
 ㉘ V. 7309~12  
 ㉙ V. 7348~50  
 ㉚ V. 7399~7401  
 ㉛ V. 7431~7500

- ㉜ G. Paré 匣 匣 Chap. W, Autour de la prison de Bel-Accu eil P. 147  
 ㉝ V. 7525~7539  
 ㉞ V. 7591~7594  
 ㉟ V. 7637~53  
 ㊱ V. 8757~80  
 ㊲ V. 8307~354, 9679~86  
 ㊳ V. 9687~706  
 ㊴ V. 9707~43  
 ㊵ V. 9744~54  
 ㊶ V. 9933~986  
 ㊷ V. 8459~9420  
 ㊸ V. 13037~41  
 ㊹ V. 13617~19  
 ㊺ V. 13265~71  
 ㊻ V. 13885~88  
 ㊼ V. 13959~966  
 ㊽ V. 14027~14030  
 ㊾ V. 14031~38  
 ㊿ Anglade 匣 匣 Chap. V. Les principaux troubadours, P. 101 ~104  
 ① V. 8463~66  
 ② ヒトキマス 痴愚神札 渡辺一夫訳 四九~五〇頁 河出書房  
 ③ Louis Thusane : le Roman de la Rose, Les origines du Roman de le Rose, P. 11~12  
 ④ cf encore. Anglade 匣 匣 Chap. W. La poésie religieuse P. 197~198.